

### 3. 心の Well-Being

添田隆昭 (高野山大学 学長)

高野山大学は、その淵源を、空海弘法大師の創設された綜芸種智院に持ち、1200年間、営々として密教とは何かを探求してきたが、その根幹を為す密教学科は入学定員30名の小さな大学であり、果たして、今回与えられた「再び Well-Being を考える」という題目に充分お答えできるのか、甚だ心許ない所ではある。

Well-Being と言えば、どうしても、社会的生活の質や肉体的快適が意識されていると思われるが、精神的には「安心」となるであろう。この言葉は伝統的には「あんじん」と読み、死後への不安からの解放を意味していた。現代は、日本人の来世観が揺らいでいるように思われるので、「安心」を「再び」考える良き、チャンスかとも言える。

#### 東北大震災の後で

私の父は福島県石川郡石川町の出身であり、近隣に縁者がたくさん残されており、日頃から、自分の半分には東北の血が流れていると思っており、東北の出来事には無関心では居れない。先頃の大震災から6年を経て、様々な体験談が出版されており、愛する人、大切な友人を失った方々にとり、その悲しみと向き合い、それを乗り越えて、自らの気持ちを文字にするために必要であったのが、6年という時間であったのかとも思われる。その体験のいくつかを、かいつまんで紹介させていただきたい。

ある宅配便の運転手さん。海沿いの堤防の上を走っている時、地震に遭遇した。地震が起きたら山へ逃げろ、と教えられきた。しかし、前方の車が皆止まってしまって、運転手は車から降りて海の方を見ている。前に進むことができない。さっき通って来た道に山へ曲がる道があったと思い出し無理矢理Uターンして、その道に入った。すぐに、交差点があり、カーナビは左へ進むよう指示を出している。ところが、突然耳で、

「右じゃ。」  
の声。思わずハンドルを右に切った。すぐ、次の交差点が見えてきた。今度もカーナビは左方を提示している。しかし、

「今度も、右。」  
の声。そっちへ行ったら元の木阿弥と思ったが、その声には抗うことを許さない強さがあった。又、指示に従ったが、カーナビはグルグル回り始めて、役に立たない。

「ともかく、行けるところまで行こう。」  
と決めたら、目の前に、大型車が通れる細い坂道が。そこを駆け上って行くと高台に出た。後ろを振り返って見ると、さっきまで居た堤防は波に飲まれて跡形もなく、途中の家々も第二波のために屋根まで隠れている。

「奇跡的に一命を取り留めたな。」  
と思うと同時に、  
「あの声は誰だったのか。祖母のようでもあったし、少し、違ってもいたし。」

ともかくも、真夜中に自宅に帰り着き、母に告げた。母曰く、

「それは、あなたの曾祖母。昭和8年の三陸の津波で命を落とした。」

津波が引いたその晩。命からがら高台の寺に避難した人達の中で、

「焚き火をしよう。その明かりを求めて登ってくる人がいるかも。」

という声があった。皆で端材を集めて、火を消さないための当番も決めて、火にあたっていた。すると、寺に至る坂道を登ってきた若い女性がいた。

「ここは、安全ですか？」

老婆が、

「サアサア、こっちへいらっしゃい。誰か中へ入って熱いお茶を持ってきてあげなされ。」一人が盆にお茶を乗せて持参し、もう一人が乾いたタオルを持ってきて女性の肩に掛けた。髪の毛は濡れである。偶々、その手を取ると、その手は、死人のように冷たい。すると、この

女性、スックと立ち上がり、  
「息子達を連れて来なくっちゃ。」  
と言い残し、坂を下り始めた。老婆が、  
「誰か、若い衆。後を着いて行ってあげなされ。」  
その青年はすぐに帰ってきて、  
「どうしたの。」

「いや。坂の途中まで姿が見えたんですけど、  
坂降りた途端、見えなくなっちゃんです。真っ  
暗闇だし。」

「そう。しかたないわね。」  
やがて、一夜が明けた。火の番をしていた青年  
が寺に駆け込んできて、  
「昨夜の女性が来た。」

皆  
「あら、良かった。」  
と迎えに表に出た。唯、この老婆だけが、本堂  
へ入って、念仏を挙げ始めた。外へ出た人達は、  
想像を絶する光景を目にすることになった。  
坂を登ってきた場所に、子供の遺骸が二つ並べ  
られていた。先の青年曰く。

「夕べの女性、右手に赤ん坊、左手に男の子の  
手を引っ張って登ってきて、最後に、深々とお  
辞儀をして、”この二人を宜しく願ひいたしま  
す。”と言ったまま、姿が消えちゃったんで  
す。」

老婆だけが、この女性は既に死んでいるという  
ことに気がついていて。

この本の著者は、この女性のことを伝え聞いて、  
このことだけは、なんとか未来に伝えてお  
かねばならぬと考え、執筆の動機としたと記し  
ている。

結婚が決まったある女性、フィアンセと楽し  
い日々を過ごしていたが、地震が起きた。フィ  
アンセが自宅に駆け込んできて、津波が迫って  
いることを告げ、手に手を取って家を出たが、  
すぐ、津波に襲われた。女性は偶々、波に打ち  
上げられて、近隣の屋根の上に放り投げられ、  
そこにしがみついて、一命を取り留めた。男性  
は波に飲まれた。他の避難所を探したが見つか  
らず、自宅の周辺で再訪を待ったが無駄だった。  
やがて一年が経ち又3月11日が繞ってきた。  
一周忌の合同慰霊祭があると聞いて、なんとか  
参加したいとバスに乗ったが、財布にお金が無  
いことに気付き、次の停留所で降りて、仮設の

ATMへお金を引き出しに行った。ところが、そ  
のATMの前にたくさんの人が並んでいて、全  
く進めない。とうとう、

「アノー。急いでるんですけど。」

と声を掛けた。先頭の男性が、

「ア、すみません。」

と振り返った。なんと、フィアンセだった

「一年経っても全然復興が進まないもんだか  
ら、このお金を使ってもらおうと思って。」唯、  
返事したまま、どんどん姿が消えて行く。

「待って。行かないで。」

しかし、姿は消えてしまった。気がついたら、  
前に並んでいた人達、皆、着物がずぶ濡れであ  
り、この人達もどんどん消えてゆき、仮設の  
ATMがそのずっと向こうに透けて見える。や  
がて、誰もいなくなってしまう。広場の真ん  
中で泣き崩れている女性に気づいたある運転  
手、

「我々もこれから慰霊祭に参ります。一緒に参  
りましょう。」

津波のために家も船も全て流されてしまっ  
たある漁師さん。仮設住宅でブラブラしても  
仕方ない。瓦礫の仕分けをする仕事につき、泥  
まみれの小さな箱を見つけた。中はきれいで、  
指輪が入っていた。班長さんの元に届けたとこ  
ろ、横にいた人が気づいた。

「それ、オルゴールじゃな。どんな曲が入っ  
ているのかね。」

なるほど、小さなハンドルがついており、回し  
てみると、聞いたことのある曲が流れだした。  
別の人が、

「それ、ショパンの別れの曲じゃ。」

と教えてくれた。班長さんに、

「あそこに、貴重品と書いた棚がありますから、  
そこに置いてください。」

と言われて、又、現場へ帰った。すると、先程  
まではいなかったのに、若い女性が参加してい  
る。

「あ、これは、どこからから来てくれたボラン  
ティアじゃな。」

と思い、後ろから声を掛けた。

「この仕事は、若い女性には、なかなかたいへ  
んでしょうが。」

女性が答えた。

「今、ここで、指輪が見つかったものですから、一緒に置いておいたネックレスもあるかと思って。あの指輪は分かれた彼氏からもらったものですから、別れの曲の入ったオルゴールに入れておいたんですけど。」

「ええ。ひょっとして、あんた。」

ここで初めて、この女性が後ろを振り返った。なんと、彼女には口が無い。目も鼻も消しゴムで消したようにボンヤリしている。津波のために、顔の表面が削ぎ落とされている。あまりのことに、漁師さんはその場で気を失ってしまった。近くの人達が、何か悪いガスでも吸ったのかと思い、救護所へ運んでくれた。班長さんから告げられた。

「あんた、今日はもういいですから、家に帰って下さい。」

暫くして、同じ場所でネックレスが見つかったと言う報告を受け取った。

奥野修司氏による「魂でもいいから、そばにいて」（新潮社）にはこのような体験談が次々と語られている。我々の知らない所で東北ではこんなことが起きていたのである。この様に、津波のために非業の死を遂げられた方々の無念の思いに接し、涙無しには読めない本である。

### これは、東北での特異体験？

唯、全国紙の書評欄にも取り上げられていたが、ある書評氏は、

「先の阪神淡路大震災でもたくさんの方が亡くなられたが、その後、この様な体験談は聞かれなかった。かつて、柳田国男が”遠野物語”の中で、東北での死者と生者との密接な交流を記しているが、やはり、東北と言う土地柄が、この様な体験談を紡ぎ出したのだろう。」

と言った趣旨を述べていた。確かに、東野物語を繙くと、こんな話が出ている。

「危篤状態と噂されていた豪農の主人がある日、ふと菩提寺にやってきた。住職はお茶など出して懇ろに接待し、世間話などして帰らんとしたが、所作に不審な点があったので、住職は小僧に後を追わせるところ、皆に挨拶もし、普通の態度であったが、街角を曲がった所で見えなくなった。この夜、死去した旨知らされたが、

とても、出歩ける状態ではなかったという。本堂に行ってみると、老人の座っていた場所の畳に飲んだはずのお茶がみなこぼれていた。」

なるほど、先の、高台の寺に子供の遺骸を運んできた若い女性の話とよく似ている。皆の前で茶を飲んだり、普通に話しをしたり、途中で姿が見えなくなる等そっくりである。では、これらが東北地方に限られた事象なのか。

### 死者との遭遇

決してそうではない。

ある所で、先の宅配便の運転手の体験談を披露したところ、兵庫県にお住まいの婦人が、

「今日の話は、私が昔祖父から聞いた話とよく似ています。」

と言ってこられた。

「祖父は戦前陸軍に所属しており、南方へ派遣されたが、途中、アメリカ軍の潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没した。沈み行く船の舳先から、真っ暗な海に飛び込み、無我夢中で泳いでいたところ、突然、耳元で、”右じゃ。”

と言われて、右方に泳いで行った所、大きな木の板が浮かんでおり、それにしがみついて九死に一生を得た。この、祖父の体験と先ほどの宅配便の運転手さんの体験はそっくりです。」

立花隆は「臨死体験」（文藝春秋社）の中で、ケネス・リングの「オメガに向かって」から、次の様なエピソードを引用している。（趣意）

あるアメリカの老婦人は不思議な夢を見た。見知らぬ若い女性が、手にクチナシの花束を持って現れ、

「母親のヘンリー夫人にこれを届けて、私はお母さんの横におりますからと伝えて欲しい。」と頼んだ。目が覚めて、

「不思議な夢だったけど、ヘンリーさんて誰だろう。心当たりもないのに。」

ともかく着替えて、行きつけの喫茶店に朝のコーフィーを飲みに出かけた。すると、喫茶店の片隅でウエイターの男性が会話をしている。

「ヘンリーさん。もう一杯どうですか。」

昨夜の夢の人かと思い、その女性の元に行き、「夕べ、こんな夢を見たんですけど。」

「あ、それ、私の娘です。先般交通事故で亡くなりました。生前はクチナシの花が大好きだったんですけどね。」

ということで、この女性、既に交通事故で亡くなっていた。自分が死ぬことによって、母親はあまりの悲しみのために、もう、現実の生活が成り立たなくなっている。なんとか、立ち直ってほしい。

「お母さん。私は、姿、形は見えなくなりましたが、ずっと、お母さんの横におりますから、そんなに、嘆き悲しまないで下さい。」  
ということ、どうしても伝えたい。それで、次の日の朝、喫茶店で母親と出会うことが確実な、ある婦人を探し出し、その人の夢枕に立って、自分の思いを母親に伝える。クチナシの花を持っていれば、母親はキッと娘だと解る。亡くなってから数週間が経っていた。

日本を代表する童話作家、先頃亡くなられた、松谷みよ子さんの著書「あの世からのことずて」に、こんな話が紹介されている。

読売新聞社が主催して「私の手作り絵本」というコンテストが行われることになり、審査委員を依頼され、全国から作品が集まり、最優秀に選ばれたのは、小学校2年生の岡田将史君が書いた、「僕と魔女」であった。その表彰式が行われたが、本人は欠席で母親が代理出席していた。理由を聞いてみたところ、既に交通事故で亡くなっていた。小学2年生の一人息子を失い、ショックで母親は入院した。ある夜、母親の頬に息子の息がかかる。

「お母さん。僕の書いた”僕と魔女”まだ机の引き出しの中に入ってる。早く出して。」

でも体が動かない。空が白み始めてやっとベッドから這い出し、自宅の父親に連絡した。父親は、勉強机の引き出しの中に、読売新聞にくるまれた作品を見つけ、慌てて投稿したところ、幸い締め切りに間に合った。この顛末を知っていた主催者の、

「この作品が入賞して本当によかった。」  
と言う声には実感が籠っていた。

五島列島出身の今井美沙子氏の著書「夢の知らせ、虫の知らせ」の中にも次のエピソードがある。

幕府の長い禁教政策を耐え抜いた五島列島の人々の中には、今もキリスト教に対する熱い信仰が残されている。熱心な信者であった母親の手一つで育てられたある青年、都会に出て就職したが、やがて、信仰とも遠ざかってしまった。ある夜、突然の胸の痛みに苦しみ始めた。同じ頃、近くの司祭館の玄関の扉を激しく叩く音がする。神父が出てみると、見知らぬ中年の女性が必死の形相で立っていた。

「神父様。息子が死にそうです。なんとか、良き信者として天国へ行けるように、生きていく内に、終油の秘跡を授けてやって下さい。」  
神父が承諾すると、女性はアパートまでの道順を詳しく説明した。着替えて出てくると既に女性の姿は無かった。アパートに帰ったか、医者を探しに行ったものと思ったが、アパートには一人の青年が苦しんでいるばかりであった。懇ろな秘跡の終わるのを待ちかねたように、青年は神父の腕の中で息絶えた。しかし、母親は帰ってこない。夜中に明かりが着いているのに気づいた住人が部屋に集まってきて、青年の死を知った。神父が目を止めた机の上の写真には、先ほどの女性が写っている。神父は、

「この母親、なかなか帰ってこないですね。」

「いや、3年目に亡くなりましたよ。これで、天涯孤独になった、と本人は悲しんでました。」

「そんな。この人に呼ばれて私は来たんですよ。ここも、初めてだし、この青年も教会に来たことがありません。」

神様は、青年を天国に迎えるべく、先に天国に来ていた母親を司祭館に差し向けたのだと、神父は解釈した。

## 死者の行方

これらの死者との出会いは、決して、生者の願望でも幻覚でもない。東北で起きていたことは、東北だけではなく、世界中で、宗教の差を超えて体験されていることが知られるであろう。これらの体験談で驚かされるのは、死者達が、この世で起きていることを、よく、知っていることである。90年前の津波によって命を落としたある女性、同じような目に遭わんとしているひ孫を高台に導く。ある青年は、「一年経っても復興は進んでいない」と言い、今日、

フィアンセが一周忌の法要に参加してくれる。でも、財布の中にがお金がない。だから、このATMで待てば彼女に会える、ことを知っている。「今、指輪が見つかりました。ネックレスもあるかと。」と、自らの幻姿を漁師の前に現した若い女性。「この婦人は明日の朝、喫茶店で母親と出会う。だから、この婦人に託せば、自分の思いを母親に伝えることが出来る。」とクチナシの花を持って夢に現れたアメリカの女性。小学2年の少年は作品の締め切りが迫っていることを、夢で母親に伝える。

それに加えて、人前で、会話をしたりお茶を飲んだり、子供達の遺骸を運んできたり、司祭館の扉を叩いたりすることもできる。

このような死者の声に真摯に耳を傾けるなら、我々は、日頃、なんとなく、「人間は死ぬ時には、肉体の働きが停止し、脳の働きが失われ、それによって、心も失われる。人間は死によって無に帰すのだ。」と考えているところもあるが、

「そんなことは、絶対に無い。」  
ことも知られるであろう。これだけの数の死者の声に接して、尚、「死んだらゴミになる。」と言う人がいたら、その人は死者を冒瀆していると言わざるを得ない。死者は、普通は、その姿、形を見ることは無いし、その声を聞くことも無いけれど、いつまでも、我々の側におり、そこから、残された我々を見つめていると言った方が、より事実に近いのではなからうか。

従って、あの世と言ひ、天国と言ひ、極楽浄土と言ひ、いずれも、手の届かない遠方の架空の場所ではなく、我々が生きているこの空間こそが死者の生きるあの世であり、死者と生者はいつまでも、同じ空間を共有している、と言うべきであろう

## 日本古来の来世観。

万葉集の中で、柿本人麻呂は亡くなった妻を偲んで、

「隠りくの 初瀬の山の 山の端に いぎよう雲は 妹にかあらん」  
と詠んだ。「こもりく」は現在の奈良県桜井市にある長谷寺の周辺、初瀬に掛かる枕詞であり、死者の霊の籠もる所であった。即ち、万葉人に

とって、死者は身近にある聖山の頂上あたりに、いつまでも、雲として漂うものであった。これが、日本人の古来の来世観であり、もし、インド人が考えた阿弥陀様がおられるとするならば、その浄土は、あの山の端であってほしい、と考えるのも自然であったろう。海に囲まれた日本ではあったが、西方極楽浄土は、真っ赤な太陽が沈む海の彼方とはならなかった。来迎する阿弥陀様は海を越えて来るのは稀で、大抵は、山上に、顔を現し、25人の菩薩たちを引き連れて、山から下りてこられる。おそらく、インド人の考えた西方極楽浄土と古代日本人の考えたそれとは違っている。

逆に、インドで生まれた仏教は、この様になることによって初めて、日本人の間に定着することができた、と言うべきであろう。

## 甦る、古来の来世観

私の幼少期には、「嘘をついたら閻魔様に舌を抜かれる。」と教えられ、閻魔様の恐ろしい顔や、おどろおどろしい地獄の様などを描いた絵本が周辺に散らばっていた。今日、閻魔様を持ちだして子供に説教する親はどこにもいない。三途の川や脱衣婆と共に閻魔様も既に、日本人の心の中に存在する場所を失い、宛も、不法滞在の外国人のごとく、新宿の公園にでもその住み処を求めざるを得なくなっている。地獄や閻魔様への恐怖が薄らぐということは、閻魔様のカウンターパートナーであり、地獄からの救済者であった、阿弥陀様への信仰も希薄化せざるを得ない。極楽浄土の日本化に取り組み、やっと、成功したかに見える僧侶達の苦勞も、このコロナ禍によって確定的となった仏教離れや、葬儀の簡素化の前で、烏有に帰した感がある。恐らく、ヨーロッパにおけるキリスト教の衰退も、近代人が地獄の存在を信ずることが出来なくなっていることに起因しているであろう。地獄の恐怖を強調すればする程、そこからの救済者が存在感を高めるのは自然の道理であり、恐怖が希薄化すれば、救済者の存在も希薄化する。日本でも、一部の怪しげな新興宗教は、地獄を持ち出して信者の心を縛ろうとしているが、決して、広がりを持つことは無いであろう。

映画「ゴッド ファザー」の中で、主人公が

糖尿病の発作に襲われ、死線を彷徨ったあと、バチカンの高名な枢機卿に告解を依頼するシーンがあったが、その時、枢機卿は、水を張った庭の石桶を指し示し、

「この石桶の表面は水に濡れているが、中は濡れていない。キリスト教もヨーロッパ人の心の表面を濡らすことができたが、その心の奥底までは濡らすことができなかった。」

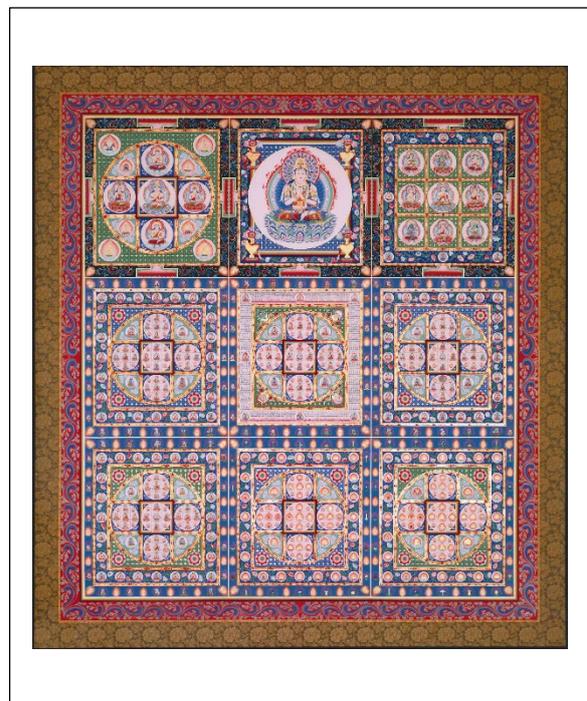
と発言したのもこの辺の事情を物語っているのであろう。

しかし、地獄の恐怖が軽減されたからと言って、死そのものへの恐怖が無くなるわけではないので、当然、それに変わる新しい来世観が必

要となる。一時、大流行した「千の風になって」という歌の原作者は不明であるが、キリスト教圏で生まれたことは確実であり、9・11ニューヨーク・テロの一周忌に、父親を亡くした少女によって原詩が朗読されたことも知られている。この詩では、死者は、時として風であり、太陽、星、雪、鳥である。キリスト教的な天国も地獄も出てこない来世を語るこの詩が、キリスト教世界で受け入れられていることに、私は注目したい。仏教の希薄化の次にやってくるのは、日本人の魂の一番奥底に秘められてきた、古来の来世観の復活であろう。そして、それは、東北の死者達の声でもあるのである。



胎蔵曼荼羅



金剛界曼荼羅

上に掲載した曼陀羅の写真は、筆者の添田隆昭氏から提供いただきました。氏は、高野山・金剛峯寺大僧正、前事務検校執行法印です。

空海は、大同元年(806)、わが国に密教の経典と共に、曼荼羅を請来したとき、『御請来目録』の中で、密教や仏教の真理とは何かを説いている言葉と共に、曼荼羅とは何かについて次のように説明している。

法は本より言なれども、言に非ざれば顕はれず。真如は色を絶すれども、色をもってすなわち悟る。(略) 密蔵深玄にして翰墨に載せ難し。更に凶画を借りて悟らざるに開示す。

“空海の思想と曼荼羅” 村上保壽

高野山大学密教文化研究所紀要第10号 1997年1月

[https://www.koyasan-u.ac.jp/laboratory/pdf/kiyo10/10\\_murakami.pdf](https://www.koyasan-u.ac.jp/laboratory/pdf/kiyo10/10_murakami.pdf)